

止まらないエルサルバドルの日本語教育

はじめまして。2020年6月より国際交流基金メキシコ日本文化センターで日本語専門家をしています、佐藤志穂です。こちらではエルサルバドルをはじめ、中米カリブ地域の主に日本語教師支援に携わっています。

1. パンデミック中も進み続けたエルサルバドルの日本語教育

エルサルバドルとの出会い、より正確に言えばエルサルバドルの「人」との初めての出会いはオンラインででした。本来であればメキシコに渡り、そこを拠点としてエルサルバドルにも出張しながら教師研修や日本語教育の調査をさせてもらう予定でした。しかし渡航予定だった2020年6月と言えばまだパンデミックの真っただ中、直ちにメキシコに渡ることは叶わず、残念ながら10か月の間日本に居ながら遠隔勤務することとなりました。

こちらの日本語教育に少しでも近づきたいと思い、「中米カリブ日本語教育ネットワーク」という当域の日本語教師グループの会長を務めるアントニア先生にオンライン面談を申し込みました。この面談で中米カリブ地域の日本語教育の状況やエルサルバドルについて教えてもらったのが、私とエルサルバドルの「人」、アントニア先生とのファーストコンタクトでした。

誰もがステイ・ホームを余儀なくされた時期、エルサルバドルも例外なく、日本語授業がオンラインに切り替えられました。しかし、先生方は遅しいです。このような逆境を逆手に取るかように、2020年～2021年は実にいろいろなことにチャレンジされてきました。それまで毎年対面で行われていた恒例のスピーチコンテストを思い切ってオンラインで実施してみたり、先生方で組織さ



2020年中米カリブ地域『まるごと』使い方研修

れていた「エルサルバドル日本語教師会」を法人化し、「エルサルバドル日本文化センター絆（通称、KIZUNA）」というオンライン日本語学校を立ち上げられたり。KIZUNAではより年齢の低い学習者を対象としたクラスが開講され、さらに地方在住の方も日本語学習にアクセスで

きるようになったことから、2020年12月の開校当初は200人を越える学習者が集まったとのことでした。パンデミック中でも止まらなかった、むしろオンラインだからこそできることは何かと前向きに考え、即、行動に移されてきた先生方とそのチームワークを尊敬いたします。

2. 満を持してサンサルバドルへ

2021年4月に一旦はメキシコに渡ることができたもののまだ国を越えた移動は難しい状況で、エルサルバドルの先生方とはオンライン日本語教師研修等を通したお付き合いが続きしました。エルサルバドルの大方の先生方は本業をお持ちで、その傍ら、平日の夜や土曜日を利用して日本語を教えていらっしゃる兼業日本語教師です。本業と日本語の授業担当の隙間を縫って日本語教師研修に参加するのは肉体的にも精神的にも厳しいことに違いありません。それでも「日本語や日本と関わり続けたい」「教えることが好き」「学習者にできるだけ実地に日本語を使う機会を持ってもらいたい」といった動機をもとに、日本語教育を続けてくださっています。

メキシコに来て約2年経った2023年5月、ようやくサンサルバドル出張が叶いました！今回の出張のメインの目的は、日本語教師研修を行うことでした。ホセシメオンカニャス中米大学（UCA）の言語センターの教室をお借りして、オンラインと対面とで参加してもらうハイブリッド形式で行いました。写真はその時の様子です。これまで約3年間、インターネットの平面上で、上半身だけでお話ししてきた先生方と生で対面できたことは心から嬉しかったです。やはり全身から伝わってくるエネルギーが違います。

『まるごと』の使い方 ふりかえり研修

Capacitación para reflexionar
entorno al uso del "Marugoto"



4月21日 - 5月19日(金)
オンライン@ZOOM 5回
16:00 - 17:30
(UTC -6)



5月20日(土)
ハイブリッド
※対面はUCA, El Salvador
10:00-12:30 +
14:00-16:30
(UTC-6)



mcjpf.go.jp · fb / ig → @fjmex1

JAPAN FOUNDATION
MEXICO

3. スシ・グアナコとププサを囲んで



日本語教師研修の日の昼食は、先生方にとある中華料理屋さんに連れて行ってもらいました。そこで目を引いたのが、「スシ・グアナコ」というメニューです。レネ・コントラス先生によれば「グアナコ」は元はリャマのような動物だけれども、エルサルバドル人が自国の人のことを自嘲的にそう呼ぶことがあるとのことでした。説明に目を向けると「エビフライ、クリームチーズ、フライドバナナ、アボカド、カピータ・チーズ、ロロコ、スパイシーマヨネーズ」と書いてある、エルサルバドルがこれでもかとぎゅぎゅっと詰め込まれたこのスシを注文しました。フライドバナナと酢飯の相性が気になる（不安）でしたが、意外にも馴染んでおり、ぱくぱく食べて元気が出ました。醤油との相性もなかなか良く、先生方にもご好評でした。



さらに研修の日の夕食は先生方と大使館職員の方に、ププサの会をしていただきました。「佐藤さん、エルサルバドルに来られなくて、ププサも食べられなくて、残念ですね。」オンラインで先生方と話すたびにそう言われていたので、ププサとクルティード、トマトサルサが目の前に運ばれてきたときにも「やっと会えたね」と声をかけたくくなりました。ププサと一緒に飲むと最高と言われたコラ・チャンパンもいただきました。会の席ではいつから日本語学習を始めたとか、実はこの先生の教え子だったんだとか、ここは前の恋人と来たレストランだとか、昔の証明写真と今の顔が全然違うとか、先生方の日常やこれまで築いてこられた先生同士の関係性が垣間見え、ああ、人との会話ってこうだよなと安心するひと時でした。

離れていてもオンラインで会議や教師研修を行うことができるようになったことは確かにパンデミックを経て得た強みではあります。しかしそれだけでは、本編以外の、その人の生活や考え方、経験に触れられるようなおしゃべりがごっそりそぎ落とされてしまう点にはやはり気をつけなければならないと思います。人間関係が生まれるきっかけや、それまで構築されていた関係を温め育てるチャンスを奪っているかもしれないからです。エルサルバドルでは現在オンライン日本語教育が主流になりつつありますが、生で会ってその人とことばを交わす価値は、様々な環境の変化に適応しチャレンジし続けた先生方だからこそ感じていただけるものと信じています。どうかこれからも、先生方や学習者のみなさんがスシやププサを囲む空間が在り続けますように！

佐藤 志穂（さとう しほ）氏

2020年6月より独立行政法人国際交流基金メキシコ日本文化センターの日本語専門家として、主に中米カリブ地域の日本語教育の支援に携わる。エルサルバドルの日本語教師等を対象とする教師研修の企画・実施、日本語教育に関する情報収集や広報などを行う。